

校長室

だより



R7.5.20 Vol.7

残したもの

先日、4年生が「校長先生!康誠先生に動画送りたいです!」と言ってきました。「いいよ!」「私たちは元気です!康誠教頭先生も元気にがんばってください!運動会も絶対来てくださいね!待ってま〜す!」そんな内容でした。

私にとってはとても世話の焼ける後輩でしたが(冗談ですよ。笑)子供にとっては大好きでたまらない先生だったんでしょうね。私たち教師は子供たちへの学習指導、生活指導が仕事です。が、その関わりの中で、子供たちに何が残せるのか。それを大事にしたいと思います。康誠先生、きっとたくさんのすてきなものを子供たちの心の中に残してくれたんでしょうね。



たかが九九 されど九九

「AI(デジタル)が様々な分野を席卷する今、四則演算等、それに任せたらいい。」これは正しくもあり、間違いでもあると私は考えています。とりわけ、児童期においては、「間違いです!」と断言します。子供たちの生活場面において、何かを分ける、数を数える、さらに多くのものを分ける、数えるなどは、よくある状況です。四則演算を身に付けるからこそ、その場面を解決できるわけですね。その経験が、小さな達成感や充実感となり、自己肯定感につながっていきます。私たち大人も記憶にはないかもしれませんが、そういう経験の積み重ねの中で自己を形成してきています。

詰め込むだけの教育は間違いです。が、インプットがないとアウトプットするものが生まれません。九九は反射で答えが出るくらい、やりこんでおくことが大切な学習です。

四方山話真穴 ver2. 其の七(反面教師)

今春、次男坊も無事就職をして私の子やらいは終わりました。就職から1か月经った5月の大型連休に帰省してきて、「3人でご飯食べいこうや」と私と家内を誘ってくれました。10年近く前でしょうか。長男坊は高校を出て働き始めました。その初任給で私とこの次男坊(当時高校生になったばかりだったかな)にラーメンをおごってくれました。次男坊がそれを覚えていたのかどうかはわかりませんが、私にとって忘れられない日が1日増えました。今、校長という立場になり、教育や子育てについて、ああだこうだと講釈ばかりたれていますが、自分の子育てを振り返ると、ほんとに穴があったら入りたい…。厳しただけの放任親父!今、当時の自分に会うことができるなら、間違いなく「こら!若造!!ちょっと座れ!」と目の前に正座させて延々と説教をかますでしょう。その後悔が反動となって孫にデレデレのバカ親ならぬバカじいじを生み出しているわけです。間違いなく、母親をよきロールモデルとして、私をこうはなりたくない反面教師として子供たちは育っていったのだと思います。後悔ばかりですが、無事育ってくれていることに感謝です。『末は博士か!大臣か!』我が子に対する期待は当然ありました。でも子やらいが終わって、我が子を見るとき、「ご飯行こう。」と声をかけてくれるだけで十分すぎると感じます。長男は我が子(孫)にしっかり関わっています。私ができなかったことを当たり前のようにこなしている長男をみて想いが込み上げます。(自責の念でしょうか、後悔でしょうか、嬉しさでしょうか、よくわかりません…汗。)そして真穴っ子たちを見るとき。学習、運動ができることに越したことはありません。教師ですから、その指導を頑張ります。ただ、たとえ、それができなくても、人の気持ちを一生懸命、想像することができる子になってほしいと切に思います。人が人によりよく生きるってそういうことじゃないかと…。

----- 切り取り線 -----

便りの感想や学校への要望等ありましたら、お聞かせください。今後の学校経営・運営に役立てていきたいと思っています。